

過去が教えてくれるもの

野田 幸江



子どものことを学び、子どもとのかかわりを仕事とする様になつて、自分の過去を重ね合せることによつて、その時の子どもの気持を理解したいと思つたことも一度や二度ではなかつた。しかし、それはいつも満足すべき結果を得ていない。不思議と思い出せないのである。断片的に色々な事実を思い出すこ

とは出来るのだが、その時の自分が、その事実をどう受けとめ、どう感じたかと思い出そうとしても、それはまったく闇の中なのである。何も感じていなかつたはずはないのに。あまり感じたり、考えたりする事のない子どもであつたのか、それとも忘れる事の得意な子どもであつたのか。嫌な事のみ多く記

憶を無意識の世界に追いやってしまう様な生活だつたとも思えないのに。

しかし、女学生（現在の中学生）になった頃から

の記憶は比較的鮮明である。

女子校時代の記憶は、セーラー服の上から真白な割烹着を着て、校舎の内外を掃除している自分の姿を思い浮かべる事から始まる。当時大人のものであつた割烹着を着ることによって、大人の仲間入りをしたという恥しい様な、それでいてどこか誇らしげだった気持を今もはつきりと思い出す。それと同時に、そこには腕時計をした時、筆箱の中に万年筆を入れた時のこと等、明らかに小学生とは違う自

分を意識することの出来る現実があつた。今の子ども達は生活の中のどんな変化に、それを感じているのであろう。

やがて烈しさを増した戦争は、私達の生活を一変させた。当時二年生であつた私達は農耕動員という名目で、秋田へのクラスあげての疎開が決まつた。「柳行李一個だけの荷物と共に」の出発であつた。

いよいよ出発の日、母は、もうその頃貴重な貴重なものとなつていた小麦粉、小豆、砂糖を使って饅頭を作り持たせてくれた。大切な大切な饅頭であった。勿体なくして友達にあげるどころか、自分でもすぐには食べられなかつた。やがて秋田到着を目前に、ようやく心を決めて一口、口に入れた時に、酸っぱさが広がつた。その時の気持をどんな言葉で表現したら良いのか、言葉がない。それ以前にも、それ以後にも、何か困った事が起つた時、特に母に助けを求めようとした記憶も、母が良き相談相



手だったという記憶もあまりない。

しかし時々ふつとこのお饅頭の事を思い出し、何ともいえない暖かさに包まれた自分の存在を実感することがある。せっかくの母の思いを無にしてしまったという悔恨が一層その実感を強め、持続させてくれているのかも知れない。

秋田では、お寺での合宿であった。そこで生活の大半は、来たるべき冬にそなえての食料、主として山菜の確保であった。籠を背負い、わらじをはいて歩く片道二、三時間の山道はつらかった。

そしてある日、目的地にたどり着き山の中へと散る前に、先生からの注意があった。それは、蕨は開いたものはとらないこと。今日は一人〇g（記憶なし）とする事。とれた者から休憩、それなければ目標を達成するまでは帰れない、というものであった。その時はそれ程大変な事とも思わなかつたが、いざとり始めると、それは大変な作業であることがわ

かつた。段々に〇gというノルマが重くのしかかる。

「とれなかつたら、どうしよう」。一人二人と束ねた蕨を持って行く者が増えていく。「よーし」という先生の声が聞こえて来る。どうしよう、どうしようという不安とあせりの中で、私が思いついた事は、とつてはいけないといわれた既に開き切つている蕨をとり、中の方にかくして束を作ることであつた。何としても重さを確保しなければならなかつたからである。先生が気付かれていたかどうか、わからない。しかし、無事にノルマは達成された。

この記憶もある種のホロ苦さを持つて、今も鮮明



である。先生にしてみれば、何が何でも確保しなければならない冬の食料であつたのかも知れない。また、ややもすれば真剣さの足りない私達に喝を入れ励ますための一言であつたのかも知れない。しかし、親元を遠く離れ、人里離れた山の中で私のやつた事は、先生の思わずとは裏腹に現実をごまかすことであつた。いけない事をしてでも自分の身を守るうすることであつた。そこには頑張って欲しいという教師の願いとは、まったく異なる生徒の反応があつたというわけである。



かつて保育者養成に携わっていた時、私は学生によくこの体験を話した。励ますつもりの一言が、ごとくソビソ話の側を通ると急にそれが止んだり。いわゆる意地悪をされるのである。今、思えばたわいのないものであつたのかも知れないが昼も夜も一緒に、夕方になれば家族のもとに帰れるということもない状

まかす行為を生んでしまうこともある事實を。今にして思えば、格好の教材を与えてくれたことに感謝しなければならないのかも知れないが、その先生も今はもういない。

十二、三歳の女学生の集まりとはいえ、そこには当然いじめもあつた。仲間はずれ程度のものではあつたが、他のグループでも同じ様な事があつたかどうか定かではないが、私が属していたグループには、誰を仲間はずれにするかを決めるリーダーがいた。その友はそれ程存在感のある人物ではなかつたが、不思議と影響力を持つ人物であつた。「あの人としやべってはダメ」という一言で遊び仲間に入れて貰えなかつたり、声をかけて貰えなかつたり、ヒ

況下では、自分がその標的になった時は、唯々悲しく、じつと耐えていた事を思い出す。が、救いがあつたのは、長くても一、二か月で何となくグループへの復帰が認められたことである。

そして、しばらくの平和の後、新たな標的に向つての動きが起ころる。自分が仲間はざれにされた時の悲しみを思えば、次の標的に選ばれた友の悲しみも、つらさも判り、いじめる側にだけはたてないはずなのに、その時は自分で復帰できた喜びの大きさに、そんな事を考える余裕もなかつたし、指示に従わず再び標的にされるこわさを思えば、むしろ生き活きといじめる側にたつていた自分を思い出す。

今、いじめが大きな社会問題となつてゐるが、いじめという言葉を耳にする度に、出来ることなら消してしまいたくなるようなこの記憶がよみがえつて来る。そして、なぜ当時のいじめには、この様な復活があつたのか、なぜ自分が、この一、二か月を耐

えることが出来たのか、と思う。昔と今とでは子どもをとりまく環境が違う、否、子ども自身が変つた等々多くの意見がたたかわされ、いじめのない社会作りが指向されている現在。いじめを肯定するつもりはないが、この小さないじめの中で、私の自分自身の中に育つたものの大きさを思う時、如何なるいじめもあつてはならないとはいいけれないものを感ずる。とことん相手を追いつめないとところで、いじめがやめられる節度。その節度があることが信じられるからこそ耐えられる力。それを育てることこそ保育する者に与えられた大きな大きな使命なのではないだろうか。

このテーマを与えられ、遠くの方へ追いやられていた過去と久し振りに向い合い、その感を一層強くしている自分が今、ここにいる。

(東京都教育委員会アドバイザリースタッフ)